

4 おかしな役人——「福祉職は聖職でない」

最近、わざわざ「福祉の仕事は聖職ではない」と講演している人がいます。言論は自由ですが、私がここで問題にするのはその人が厚生省の課長ポストに

ある人であり、福祉施設職員も感心して聴き入っているとのことだからです。

同氏が昨年、北海道で話したものを要約した文（ある福祉施設の広報誌）があります。まず、それを読んで下さい。（後に同氏著『豊かな福祉社会への助走』91頁に詳しく所収）

——「第一番目に気にかかるのは聖職者意識である。障害者関係の会議等の来賓挨拶で『尊い仕事である』といった言葉をよく耳にするが、おかしいと思う。意地悪く考えると『大変な仕事をしてご苦労さん。だけど、私はやらないよ』と聞こえなくもない。聞いている施設職員も何故そんなにほめられるのか、違和感という立ちに似たものを感じるのが普通で、本当にいい施設とはそういう意識を超越している。立派だと言われるまでもなく、当たり前のこととして障害児に正面から取り組み、生きることそのものとして実践しているのが本物の施設であり施設人ではなかるうか」。——

第一点。言わんでもいいことを言って、福祉職員を惑わすのは有害無益です。人がわが職業を聖職（天職）と考えようが考えまいが、それはその人の自由

で、監督指導の立場の公務員が職員の思想感情にまで立ち入るのは越権です。本当の福祉行政とは、福祉の現場に常に謙虚で、法の正確な運営と改善に努め、そのための予算確保に努めるもので、まぎらわしいお説教はしないものです。

第二点。人がその職業を貴いものと思い、他もそう評価することは、いいことです。自分の職業を聖職として懸命に働く人こそ、最も尊敬すべき人であり、世の宝です。こうした有名無名の人々によって、歴史は正しく担われてきました。

第三に、福祉職の本質について。福祉の仕事、わけでも福祉施設の仕事とは、人の援助を絶対的に必要とする人のためのものです。福祉施設では、人と人が丸ごと直接的にかかわり合います。ですから、世話する職員が人間性（人間らしさ）に欠けると、福祉の仕事ではなくなります。常に人間性が求められている、それが福祉職です。だから、その職に身を入れてしておれば、天職意識につながりゆくのもごく自然です。

アフリカで医療救済に献身したシュヴァイツァー博士は言っています。「多くの人は生計のため、あるいは社会の利便をみたすために職業についている。でも、こういう職につこうとも人間性のある生活をする道はちゃんとある。それは助けを求めている人に対して、職業生活のかたわら、人間性のある援助を常に心がけることである。その機会は身辺に常に存在する」と。

したがって、福祉や医療の仕事は、他の多くの仕事と違って、直接的に「真の人間性をもって人を援助する」職で、天職の要素を濃く帯びてきます。博士自らも三十歳の時「神よ、ただちに、われ神に従わん」と、アフリカでの医療救済を神よりの召命と受けとめています。天職意識に導かれて、あの大事業があり「それのできる者を人類は待ちこがれている」と呼びかけています（同博士著『わが生活と思想』より）。

はたから聖職意識を押しつけるべくありませんが、人の尊厳を守る仕事は、その尊厳の由来、したがって聖職の意識につながざるを得ません。そもそも、聖職と思っただんな弊害が生じるのでしょうか。福祉上の無数の深刻な

弊害は聖職観とは無縁な仕事ぶりから噴出しているのです。本当の福祉は聖職意識に支えられて実現されてきました。これが厳然たる歴史的事実です。

---